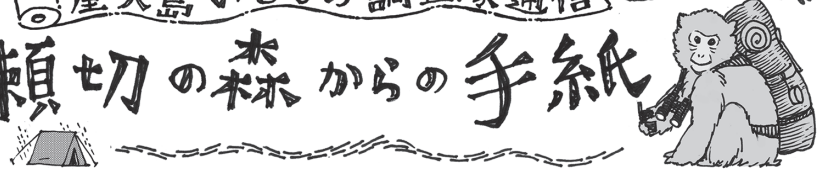


屋久島いきもの調査隊通信

# 瀬切の森からの手紙



|                                          |    |
|------------------------------------------|----|
| 時には昔の話を (5) お祝い会 (2013 年)                | 02 |
| 調査員からのクーコール (10) 西野智子さん                  | 04 |
| 調査メシ (10) バンバンジー                         | 06 |
| やくざる七つ道具 (10) ゴムバンド                      | 08 |
| 解き明かす! 屋久島の生き物の暮らし (10) 森の中に「塩分」がどれだけあるか | 10 |
| ヤクザルなよんこま (10)                           | 13 |
| 屋久島の森の住人たち (10) カラスバト                    | 14 |
| ぶらり屋久島 (5) 神父シドッチ上陸記念碑                   | 16 |
| 犬山より                                     | 18 |



## お祝い会 (2013 年)

1989 年から始まったヤクザル調査隊。これまでさまざまなことがありました。過去のある年を取り上げて、その年の調査を振り返ります。

ヤクザル調査隊の新旧調査員が勢ぞろいしておこなったイベントは、過去 3 回実施されています。2004 年 4 月の「半谷さん美野子さんご結婚おめでとう！そして調査隊は気づけば 15 周年?! いやはやなんとこれはめでたい三岳の宴」(略称、おめでとう会)、2019 年 4 月の 30 周年記念シンポジウム「1501 人で解き明かした屋久島の二ホンザルの暮らし」とパーティ、そして、今回紹介する、「好廣眞一先生の退職を祝うヤクザル調査隊の会」(略称：お祝い会)です。

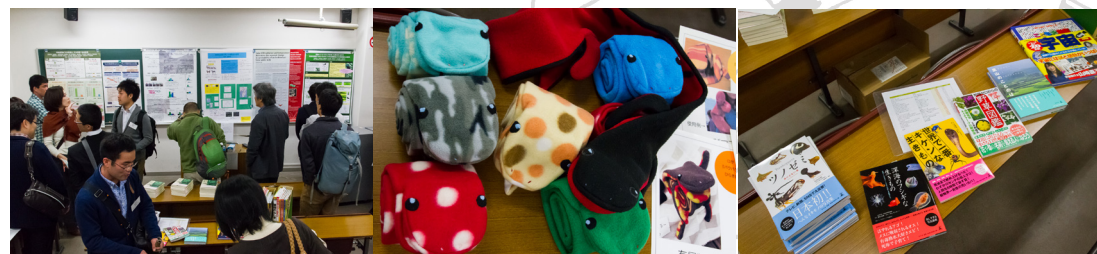
ヤクザル調査隊隊長の好廣眞一さんは、2013 年 3 月末に、龍谷大学を定年で退職されました。退職後の 4 月 20 日に、京都大学理学 2 号館を会場にして好廣さんの講演会を、そのあと、京都大学生協吉田食堂でパーティを開催しました。当日、調査員 110 人、家族ほか関係者もあわせると 132 人が出席しました。

好廣さんの講演のタイトルは、「ヤクザル調査 40 年」。前年までで 24 回の調査を行ったヤクザル調査隊は、好廣さんの屋久島の二ホンザル研究の後半に過ぎません。それ以前、当時の若手二ホンザル研究者が、屋久島に結集して、1974 年に最初の本格的な屋久島での二ホンザル調査を開始した経緯。それまで豪雪地帯の志賀高原で二ホンザルの研究をしてきた好廣さんの問題意識。屋久島西部林道に長期調査地が確立された後、屋久島全体の二ホンザル分布を明らかにするために、ヤクザル調

査隊を結成するに至った経緯。その後のヤクザル調査隊の歩み。好廣さんが、心臓手術のために参加できなかった 1995 年。事務局を任された学生たちが、無事調査を終え、自信に満ち溢れた姿で好廣さんのところに戻ってきたときの感動。最後に、調査隊が調査員ひとりひとりの人生に与えた影響について触れ、「そこで過ごした体験が、その後の自分たちの生き方に影響を与えているのではないかなと思います。」と結ばれました。好廣さんのヤクザル調査隊にかけた熱い思いの伝わる、すばらしい講演でした。そして、それを見つめる、会場にぎっしり入った調査員の顔。泣けてきました。

講演会後の 2 時間の楽しい宴はあっという間に過ぎ、最後に好廣さんがあいさつされました。万雷の拍手のあと、調査員の子供たち 13 人が、花束を贈呈しました。調査隊が何十年も続いているということは、恐れを知らぬ若者だった調査員も、人の親になっていくということです。中には、好廣さんがいなければこの世に生まれていなかった命もあります。私にとっても、当時 7 歳と 3 歳だった自分の二人の子供に、自分には、かけがえのないだいじな仲間がこれほどたくさんいることを見せられたのは、とてもうれしいことでした。

(半谷吾郎 1993-2024 年参加)



講演会の開始に先立って、調査員の活動を紹介するスペースを設けました。研究発表のポスターや、知人ぞ知る某 OG 製作のヘビマフラー、編集者をしている OG の製作した本、経営しているお店のチラシなど、さまざまなものを展示しました。



クーコールは、サルがお互いの位置を確かめるために鳴きかわす声です。  
各界で活躍する調査隊 OBOG に、クーコールを鳴いてもらいました。

## 西野智子 (西野ミドリ) 2001、2002、2005 年参加

大学 1 年生の時、薬学部に入學した割に、あまり薬に興味湧かず、自然や野生動物の方に興味がありました。野生生物研究会 (通称：野研) の先輩方が、ヤクザル調査隊にも多く参加されており、そこで色々と話を聞き、世界遺産の屋久島の森の中で過ごし、うまくいくとサルにも会えるという生活に魅力を感じ、参加を決めました。1 年目は確か、野研の皆と一緒に屋久島へ青春 18 切符を使って、真夜中の大阪駅を出発し、その日の夜に鹿児島まで行きました。途中、山口や熊本からもメンバーが加わり、道中からワクワクしていたと思います。屋久島に着いたら、半谷さんに、「ミドリ」というヤクザルネームを付けて頂きました。(レインコート、Tシャツ、さらに身に付けていたウエストポーチ、ウエストポーチから出ていたゴミ袋までもが緑色。今でもそうですが、緑色が好きです。) 森の緑と静寂の中、自然の中、ただ一人で過ごしたあの時間は、とても貴重な経験でした。サルと出会えたことは、1 回だけあったような……。そしてテン場で過ごしたサバイバル生活は、大変でしたが楽しかったです (普通の米を洗わず



著者近影もお願いしますね、とミドリさんには頼んでおいたのですが、なんと、職場の作業服も緑色で、笑ってしまいました。ちなみに今着ているコートも深緑色だそうです。

炊いた独特の風味、サバ節は貴重なタンパク源)。翌年は食当隊長を拝命し、業務スーパーヘザックを背負って、買い出しに行きました。ちょうど、部活の試合で東京に行く機会があり、東京のメンバーが集まってくれて、新宿都庁で食当打ち合わせをしました。実は、周りが関西人多めだったので、1 年目の集合日、関東の言葉の勢いに押されて、何故か壁を作っていました。でも、調査が終わる頃にはすっかり仲良くなっていて、全国から集まった学生達と、共に過ごした日々は、自分の視点を広げてくれました。

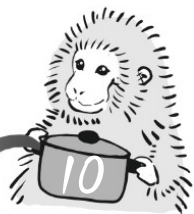
そこから、紆余曲折ありながら、大学 4 年で卒業するところ、諸事情で長くいてしまったので、最後の年にもヤクザル調査隊に参加しました。とにかく働かないといけないと思い、公務員試験を受けたのですが、不合格。それを当てにしていたので、落ちてから必死で就活したのを覚えています。何とか治験 (薬の開発) 関係の会社で働くことができ、大阪で働いていました。出張の多い仕事で、旅好きの私にとっては、楽しい仕事でしたが、結婚を機に退職し、川崎に引っ越しました。薬局で働いてみたのですが、上手いかわず、川崎市では公務員試験の年齢制限が高く、まだ挑戦できるということで、背水の陣で挑んだところ、なんとか雇ってもらえることができました。ざっくり言うと保健所で働いていて、今は環境衛生をやっています。環境と言っても、環境問題をやっているのではなく、人間の生活環境目線で、お風呂やプール、井戸等の採水、犬の登録等をやっています。主担当ではないですが、担当の獣医さんが外出中の時は、犬猫等の動物の相談も受けます。

川崎市内にも、野生動物は生息しており、ネズミ、ハクビシン、タヌキ、アライグマ等、相談があります。珍しいところでは、最近イノシシとサルを目撃情報がありました。イノシシに比べて、サルの移動速度は速く、たった 1 日で区内からいなくなってしまったので、驚きでした。かなり薄いサルとの関わりでしたが、ヤクザル調査隊のことを思い出しました。



学生時代に、特別な経験をさせてくれたヤクザル調査隊は、確実に自分の一部になっています。これからも、調査隊が続いていきますように、益々のご活躍をお祈りしています。

# 調査メシ



食事は、調査中の大きな楽しみです。電気、ガス、水道のない場所で、おいしい食事をどう用意するか。その苦闘を、レシピとともに語ります。

## 佐竹まどか 2022-2024 年参加 バンバンジー



山の上での調査が続く中、多くの人が最も恋しく思う食材は何でしょうか。それは、意外にも生野菜です。特に猛暑が続く8月、冷蔵庫もない環境では、生野菜を手に入れるのは至難の業です。誰かが持参しない限り、新鮮な野菜を口にする機会はほとんどありません。久しぶりに口にする生野菜は、特に汗だくで帰ってきた体に染み渡るような感覚を与えてくれます。その瞬間、生野菜が輝いて見えるのです。ただ、入島して間もない隊員にとっては、その魅力が少し伝わりにくいかもしれません。

その日は、私が下山してしばしの休息をとり、晩ご飯を持ってテン場へ戻る役目の日でした。「何が食べたい？」と他の調査員に尋ねたところ、「生野菜が食べたい！」というリクエストがありました。そこで、少しでも喜んでもらえるようにとレシピを考えた結果、思い浮かんだのがバンバンジーでした。さすがに野菜だけでは物足りないだろうし、少しはお肉も欲しいかなと思ったのです。

バンバンジーを作るという目標を胸に、早朝に調査に向かう隊員たちをテン場で見送り、離島する隊員達と一緒に下山しました。途中、林道でタイヤがパンクするハプニングが起きました。実はこれが、自分が乗っている車で初めてのパンクだったのです。その日のうちに帰る予定だった隊員

達（初参加）は、「今日帰れないかもしれない」とヒヤヒヤしていたようです。無事に好和荘に到着し、バンバンジーの仕込みを終え、離島する隊員たちと昼食を共にした後、宮之浦港でお見送りをしました。そして、新しく入島した隊員を迎えに行き、そうこうしている間にテン場に戻る時間が迫ってきていました。時間がかかり押していましたが、急いでまた好和荘に戻り、おいしい晩ご飯を持って上がりたい一心で作業に取り組みました（とはいえ、野菜を切るだけなのですが）。色々と考えを巡らせた結果、晩ご飯がバンバンジーだけでは少し物足りないかもしれないと思い、「調理の時間がないなら、ソーセージをゆでるだけでも良いよ」というアドバイス※を思い出し、それも追加したのですが、このソーセージに関しては、「う～ん」と一部のヒトの反応は微妙※※なものでした。実は、しっかりとアドバイスを受け取れていなかったのが原因だったのです。

バンバンジーといえば、通常は具材を千切りにするイメージがありますが、歯ごたえを重視してあえてブロック状に切ったり、普段から少し物足りなさそうにしているヒトがいることを思い出し、もやしを足して全体にボリュームを持たせる工夫もしました。その結果、ほとんどのヒトには喜んでもらえました。

今回、ほぼ初めてのテン場生活で、大量の晩ご飯を作るのも、日帰りで休息を取るのも、すべてが初めての経験でした。失敗も多く、ベテラン隊員たちからの指導をたくさん受けました。今までは上のベテラン隊員達に任せて、のほほ～んとしていたことが多かったのですが、今回は「ちょっと経験のありそうな人」という立場だったためか、思っていた以上に責任感を感じる場面が多かったです。いつの間にか老害（経験者）になっていた



たのですね。次回は、食にこだわりのある隊員達も喜ばせられるよう、ひと皮むけた自分を披露できればと思っています。リベンジできるといいなあ・・・

※この助言の真意は、ソーセージと千切りキャベツ買うだけにしたら、見送りしてもゆっくり休息できるよということでした。なのに、※※見送りに行って料理もしておまけにソーセージまで買ってきちゃって、休息にならないし量が多すぎるし（ソーセージは大半翌日の朝食に回しました）、何より、せっかく思い付いた手抜きメニューが、もう今年は使えないじゃん！

# やくざら道具10

山の中に泊ってサルを調査するのに、ヤクザル調査隊は様々な道具を駆使します。35年の歴史の中で、道具も変化してきました。そんな愛しい道具たちを紹介します。

## ゴムバンド

初期には、個人用のザックと、せいぜい段ボールにすべての荷物を詰め込んでテン場に運んでいたヤクザル調査隊も、本連載第8回「いす」で紹介したように、2008年ごろから、濡れては困るものを中心に、装備を専用のコンテナに入れて運ぶようになりました。コンテナは、テン場では便利な道具ですが、形がきっちり決まっているため、伸縮自在にぎゅうぎゅうに押し込められるザックと違って、車の中ではむだにスペースを取ってしまいます。コロナ前は最大で30人分の荷物を一気に運ぶこともありましたが、すべての荷物を一回で運べるようにするには、いろいろな工夫が必要です。さらに、2008年に携帯トイレを導入したことによって、使用済みの臭い臭いものを、車でどう運ぶか、という問題も生じました。

そこで着目したのが、車の上のスペースです。当時調査隊で使っていたジムニーには、ルーフキャリアがついていました。車の上にすのこやつぶした段ボールを置き、その上にコンテナやごみ袋を載せます。それを固定するのは、ロープワークの達人の、大谷洋介さん(2004-2014)の役割と決まっていた。荷造り用のビニールの紐や虎縄を、ルーフキャリアに架け、大谷さん本人にしかわからない方法で縛り、数10分かけて固定していました。使用済みトイレを入れたごみ袋から、なにか液体が染み出ていまし



2011年の調査で、テン場撤収時に使用済み携帯トイレを車の屋根に固定する大谷さん。

たが、「雨水だよね、きっと」と言いながら、車の上に放り上げていました。

そのうち、ジムニーのルーフキャリアは壊れてしまいましたが、ルーフキャリアではなく、車内のアシストグリップにカラビナを架け、窓を少し開けてひもを通すようにしました。こうして、調査隊の3台の車の上のスペースが、全部使えるようになりました。

大谷さんの個人的な技量に頼っていたこのシステムは、2014年を最後に大谷さんが引退すると、存続の危機に瀕しました。そこで導入したのが、ゴムバンドです。ゴムですから伸縮自在で、ゴムが伸び切る長さまでとにかく荷物をぐるぐる巻きすればよく、フックがついていて、最後に固定するのにも、ロープワークは必要ありません。めでたく大谷さん引退の危機を乗り越え、われわれはこのゴムバンドを「オオタニイラズ」と命名しました。これなら、一応、誰でも荷物の固定ができるはず…ではありますが、さすがに初参加の調査員に「やっといてね」と気軽に頼めるほどまで簡単になったわけではなく、結局(よほど器用な人が装備隊長をやっているの でなければ)、ほとんどわたしがやっていたような気がします。

オオタニイラズの導入から10年。そのあいだ、コロナ対応で、一度に集まる調査隊の人数が劇的に減り、一斉に入山・下山するスタイルをやめたことで、車の上のスペースを使ってまで、荷物を一度に大量に運ぶような事態はなくなりました。ゴムバンドは、今でも調査隊の車の中に備えてありますが、さて、再びこれを使うことはあるでしょうか…

(半谷吾郎 1993-2024年参加)



左、2017年の調査出発前。雨が降る心配がなければ、段ボール箱入りの荷物も屋根の上で運べます。  
右、助手席の人は荷物に挟まれてぎゅうぎゅうです。ゴムバンドがアシストグリップに取り付けたカラビナに巻きつけてあります。

何でも数えて記録に残しておくヤクザル調査隊と云えども、さすがに何個の使用済み携帯トイレを持って下りたかまではデータはありません。単純に計算して、28人×8泊×1日0.6個として、350個くらいになります。臭い以前に、とっっても重かったですよ。

# 解き明かす! 屋久島の生き物の暮らし 10

屋久島の生き物に関する論文を、その出版に至るまでのエピソードとともに、著者が解説します。

## 森の中に「塩分」がどれだけあるか

半谷吾郎 1993-2024 年参加

Hanya G, Kato S, Kitamura S, Kurihara Y, Honda T, Suzumura T, Ohta T (2024) Effects of distance from the sea and bedrock on foliar mineral contents in Japanese forests: Implications for mineral acquisition by folivores. Ecological Research 39: 659-675.

2018 年から 2021 年度に、わたしは、「「普通」の生態系での植物食動物のナトリウム獲得戦略」と題した研究プロジェクトを実施しました。動物は、細胞内外でのナトリウムとカリウムイオンの交換を通じて神経情報を伝達するため、ナトリウムが生存に必須ですが、植物にとってはそうではありません。そのため、植物だけを食べている動物は、何らかの方法でナトリウムを食物以外から摂取しなければならないと予想できます。われわれ自身が持っている塩味への強い欲求は、そのような、陸上の植物食性動物が共通に持っているナトリウム摂取の必要性と関連していると考えられます。

海外では、塩水が湧き出ている特殊な塩場にたくさんの動物がやってきたり、ナトリウムが蓄積される傾向のある、特定の種の枯れ木の材を動物がむしゃむしゃ食べる行動などが報告されています。ですが、海岸近くで潮風に当たる岩や葉っぱを舐めでもしない限り、ふつうに屋久島の森を歩いていて、「しょっぱい」ものはまずありません。特殊なナトリウム源が

ない「普通」の生態系である屋久島で、いったいサルやシカたちは、どのようにしてナトリウムを確保しているのだろうか？これがこのプロジェクトの問いです。

最終的に、3 本の論文を成果として公表することができましたが、ここで紹介するのは、そのうちの一つ、そもそも森の中にどれだけナトリウムがあるのかを調べた論文です。

やったことは単純で、森の中の様々な環境を反映できるように、葉っぱを集めてナトリウム含有量を測定しました。屋久島の西部林道と、ヤクザル調査隊の調査地である、標高 1000 メートル付近の大川林道終点で、西から東へまっすぐ歩き、10 メートルおきに立ち止まって、そこから一番近いところにある樹木の生葉と、その下の落葉を集めました。ただ、屋久島はやはり島ですから、海がすぐそばにあるという意味では「特殊」な環境です。そこで、わたしが住んでいる中部地方を中心に、日本の様々な場所でも同じようなサンプリングをすることにしました。中部地方は、日本列島で最も幅が広い場所です。海からの距離は、一番遠いところで 100km 以上あります。

この研究プロジェクトのメンバーは、7 割方、ヤクザル調査隊 OB でした。福井、岐阜、愛知、静岡、長野の 15 カ所のサンプリングをしてくれた、岐阜大学の加藤正吾さんは、ヤクザル調査隊でわたしの一つ先輩。わたしにとって初参加だった 1993 年の調査では、同じ班でした。2009 年から 2017 年のヤクザル調査に参加した栗原洋介さんは、勤務先の静岡大学の研究林でサンプリングをしてくれました。石川県では、1989 年の第 1 回のヤクザル調査隊の事務局だった、石川県立大学教員の大井徹さんと、

2009 年から 2015 年のヤクザル調査隊に参加した、石川県職員の近藤崇さんにお世話になりました。当時わたしの研究室の大学院生だった本田剛章さん(2013-2022 年参加)には、屋久島でのサンプリングを手伝ってもらいましたし、2014 年のヤクザル調査隊に参加された鈴木崇文さんには、職場である宮崎県幸島でのサンプリングを一緒にしていただきました。さらに、集めたものすごい数のサンプル(今数えてみたら、ほかの論文に使ったのもあわせて、合計で 6112 個もありま



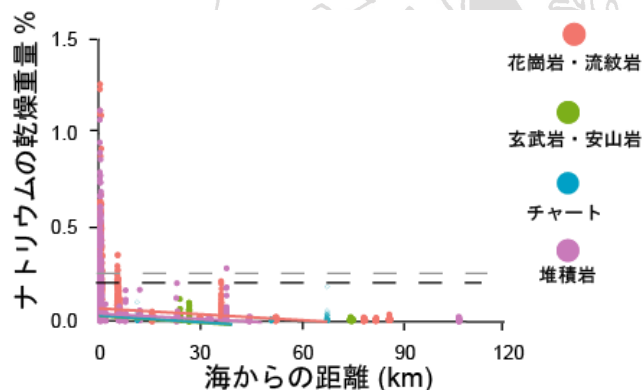
本田さんと一緒に、屋久島で集めたサンプルを整理しているところ。

陸上生態系へのナトリウムの供給は、基本的には海水からによるらしいのですが、南米全体での分布をシミュレートした論文では、海からアエロソルの形でナトリウムが到達するのは、100km くらいまでだ、と書いてありました。大陸のど真ん中、海から何千キロも離れた場所は、どうなっているんでしょうね。

した!)は、ヤクザル調査の調査員たちをバイトで雇って、ひとつひとつ処理してもらいました。

こうして、日本全国の28カ所もの森林をカバーすることができました。海からの距離が数百メートルと非常に近い、屋久島海岸部、幸島、石川県の能登島などでは、葉のナトリウム含有量が高く、飼育霊長類や有蹄類に与える食物で推奨されているナトリウム含有量を越えていました。一方、海岸からおおよそ1km離れるとナトリウム含有量は急激に減少し、海から7km離れた屋久島の大川林道終点付近では、その推奨量にはるかに足りない量しか、ナトリウムが含まれていませんでした。海から106km離れた長野県木曾町では、葉のナトリウム含有量は、屋久島海岸部の50分の1しかありませんでした。「森の中にしょっぱいものなんてない」ということを、裏付ける結果となりました。

もっとも、これだけでは、「普通」の生態系がどんなものかが分かっただけで、そこで動物たちがどのようにナトリウムを確保しているかは分かりませんね。それについても研究しましたので、また別の機会にご紹介できればと思います。



海からの距離・基岩と葉のナトリウム含有量の関係。2本の点線は、それぞれ有蹄類と霊長類の飼育個体の食物に推奨されるナトリウム含有量。



試料は、乾燥後に約0.05gを切り取って正確な重さを量り、それを耐熱瓶に入れて電気炉で灰にした後、硝酸を加えて80度で1時間熱する処理をしました。灰にする作業は、一回にこの写真の数だけしかできず、1日に2回しかできません。来る日も来る日も、この作業をしていました。



わたしが住んでいる犬山市にある東京大学の研究林でも採取を行いました。ふだんは屋久島や海外で調査をしていますが、地元でも調査ができるのは、うれしいことでした。

# ヤクザルなよんま<sup>10</sup>

## 運勢(定点)

小吉



トランシーバーの交信が盛ん

中吉



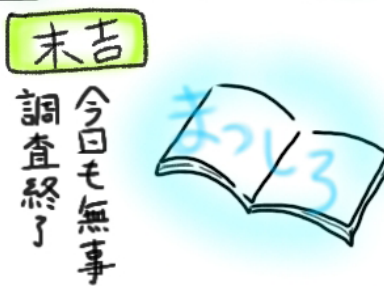
クール、枝バキ音がきこえる

大吉



サルを目視

末吉



なにもなし...もちゃんとデータ

調査終了 今日無事

# 屋久島の森の住人たち10

屋久島の森には、私たちヤクザル調査隊の調査対象であるニホンザル以外にも、様々な生き物が暮らしています。調査中に垣間見た、かれらのことを紹介します。

## カラスバト (*Columba janthina*)

国内最大のハト。全身が黒く頸から胸にかけて緑色の金属光沢がある。日本と韓国周辺の離島に分布し、暖温帯の照葉樹林を主な生息地としている。

「霧の中から呻き声が聞こえるんだよ」。誰が言ったかは忘れましたが、私がヤクザル調査初参加だった2009年の調査開始にあたり、この鳥について最初に聞いた言葉です。当時修士課程1年だった私は、カラスバトの研究を始めていたものの、DNA分析用に送られてくる羽毛しか見たことがありませんでした。その後、現在に至るまで15年に渡りカラスバトに関わることになるのですが、この鳥を初めて野外で観察したのは、屋久島でした。

定点に座っていると、確かに「ウッー、ウー」という声がどこからともなく聞こえてきます。声の主が何者か分からないで聞いていると、呻き声と言われる通り不気味に思えるかもしれません。ただ、カラスバトの声は意外に澄んでいて、私にとっては聞き心地の良いものでした。巨木を覆う霧に差し込む朝日、静寂、そこに響くカラスバトの囀り。何か吸い込まれそうになる幻想的な光景として、記憶に残っています。そういう意味では、カラスバトは研究対象として相性が良かったのかもしれません。声の不気味さで言えば、小笠原諸島で繁殖しているオナガミズナギドリの方が遥かに勝っているでしょう。

カラスバトは様々な音声パターンを持っています。典型的な囀りが「ウッー」で最も遠くに届く声です。他の個体が近くにいる時には「ペーウー」、または低く「ウー」という声を発しますが、これらは求愛を含め好意的な意味合いを持つと考えられます。一方、縄張りやペアを巡る争いが生じた

際には「ガルルル」とけたたましい声を上げて相手を攻撃することもあります。カラスバトは、ハトでありながら平和の象徴としての役割を放棄しています。繁殖期なら、ライバルを見つけるや否や雄叫びを上げて飛びかかっていきますし、鳴き真似をただで怒り出すこともあります。ヒトが攻撃されることはありませんが、上空を叫びながら旋回していたり、「ギャー」という獣のような声を上げられたら、近くに巣があるかもしれないので、気をつけてあげてください。

カラスバトは主に果実や種子を食べます。筋胃が発達しているため、大きくて柔らかい植物種子は体内で粉々に砕いて消化してしまうのですが、一部の固い種子、または小型の種子は破壊せずに排泄します。このため一部の植物にとって、カラスバトは種子散布者となります。例えばヤクザル調査の名物、果実カウントで悪名高いヒサカキは、カラスバトの恩恵を受けている植物のひとつです。またカラスバトは飛翔能力が高く、伊豆諸島や小笠原諸島では、100km以上離れた島間を広範囲に飛び回っています。こうした移動は、カラスバトに種を運んでもらえる植物にとっても、長距離移動のチャンスです。カラスバトの移動パターンには、繁殖季節や食物資源が関係しているようですが、まだまだ分からないことだらけです。私がこれまで調査してきた小笠原諸島や伊豆諸島と、島のサイズや環境が全く異なる屋久島では、全く違った動きが見られるかもしれません。サル調査の傍ら、ぜひ屋久島のカラスバトも観察してみてください。

(安藤温子 2009 - 2013 年参加)



ヤクザル調査隊の調査地で1年間、カメラトラップを設置したところ、鳥ではカラスバトがもっとも頻繁に撮影されていました。わたしは木の上にいるカラスバトしか見たことがありませんが、人がいないところでは、しょっちゅう地面に下りているようです。

# ぶらり屋久島 5

屋久島には、ヤクザル調査隊になじみの場所がたくさんあります。観光客とも、島民の方ともちょっと違う、調査隊目線で偏った屋久島のいろいろな場所のご案内です。

## 神父シドッチ上陸記念碑

屋久島のすぐそばを流れる黒潮。それは豊かな雨や色とりどりの魚だけでなく、古来より様々な人やモノを運ぶ役割を果たしてきました。かの唐の高僧鑑真も日本に渡る途中で屋久島に漂着したとされ、調査隊の拠点のある尾之間地区には「鑑真上陸の地」記念碑があります。実は、尾之間の隣の小島（こしま）地区にも、はるばる遠くから屋久島を訪れた貴賓の名前が刻まれた石碑が立っており、近年調査隊の中で密かに話題となっています。今回はそんな「神父シドッチ上陸記念碑」についてご紹介したいと思います。

ジョヴァンニ・バッティスタ・シドッチ（1668-1714）はイタリア出身のカトリック司祭です。貴族の家に生まれ、聖職者としての教育を受けた後、ローマの教皇庁で法律顧問を務めていましたが、厳しい禁教政策の取られていた日本に興味を持ち、教皇から許可を得て日本への旅に出ました。1708年10月、最後の中継地マニラから帆船に乗ったシドッチは、約50日の航海を経て屋久島沖に到達します。怪しまれないように侍の姿に変装したシドッチは恋泊の岸壁から夜明け前に上陸。翌日、村の百姓・藤兵衛に会い、初めて日本人との対面を果たしました。しかし怪しい出立ちな上に言葉も通じず、程なく拘束され、長崎、そして江戸へと送られます。江戸では尋問にあたった朱子学者・新井白石との面会があり、当時の



仲渡さん近影。こちらは永田岳山頂ですが・・・

西洋事情について新井に詳細を語った記録が残っています。その資料によれば、新井はシドッチの人柄や知識に感銘を受け、様々な興味深い会話を交わしていたようです。しかし、長年の拘束生活により41歳の若さで衰弱死しました。

シドッチの屋久島での滞在は47日余りと短期間でしたが、その後死ぬまでずっと囚われの身であったことを考えると、この期間は市井の人々と交流できた貴重な時間だったと考えられています。1980年、シドッチのことを調べてきたイタリア人神父と地元関係者の尽力により、上陸地付近に記念碑が建立されました。現在では毎年「シドッチ祭」が開催されているほか、彼の足跡を研究・顕彰する活動も続けられています。

さて、なぜこの「シドッチ上陸記念碑」が近年調査隊の中で話題となっているのか？それは筆者が数年前、何気なく尾之間周辺の地図を眺めていた際にこの場所が気になり、休日に訪れたことが発端です。尾之間からほど近くにあり、海・山ともに景色がよく、何よりそこに刻まれた歴史が醸し出す不思議な魅力。以来、この地は、悪天候等で調査がない日に調査隊が巡るおすすめの観光名所の一つとなっています。

記念碑周辺の景色は、一見すると尾之間集落からの風景とそう違いがあるわけではありません。しかし今から300年前ほど前、命を懸けてはるばる志を果たすためにやってきた「最後のバテレン」が、やっとの思いでたどりついた場所がここであった、そう思うと、そこには何か違った景色が見えてくるかもしれません。皆さんもぜひ一度、足を運んでみてはいかがでしょうか？

（仲渡千宙 2019-2024年参加）



シドッチ上陸地点の近くと推測される海岸。台風迫りくる中（というのもそういうときしかヤクザル調査隊の休日はないので！）、この岸壁を登ってきたシドッチのことを思うと、ぐっと来るものがあります。



2023年の調査では、上陸記念碑の前で集合写真を撮りました。

好和荘からもっと近くにあるはずの鑑真上陸地へも、仲渡さんは行ってみようとしたようですが、結局見つけれなかったとのこと。2024年にこちらの記念碑も新しくなりましたが、海岸ではなく県道沿いにあります。



任意団体だった時代とは違い、法人になった今では、法律に定められた手続きを、適正に行う義務があります。9月下旬のヤクザル調査隊の報告書作成作業の最中、ついでにレシートのデータを打ち込み、番号を記入し紙に糊付けして整理する作業を調査員たちにやってもらったあと、年度代わりのさまざまな書類作りに取り掛かります。ふつうのNPOなら、報告書だけでよいのですが、レンタカー事業を運営しているわれわれの場合、税金を納める必要があります。レンタカー事業は赤字なので、法人税は免除ですが、愛知県、犬山市、鹿児島県、屋久島町に納める法人地方税は、赤字でも均等割という定額を納める必要があります。税理士を雇う余裕なんてありませんから、ネットであーでもないこーでもないと調べ（…と、自分でやったかのように書いていますが、最初の2年は、特定の調査員に調べてもらっていました。この場を借りて感謝！）、最後は小牧にある税務署に行って、直接聞きます。税金を納めだして2年、だいぶ様子が分かってきましたが、それでも、書類を郵送してから半月後くらいに、種子島の県税務事務所から電話がきて、「先月出していただいた書類ですが、追加で様式＊別表＊＊を出していただきたいくて…」と、とても覚えられない内容をしゃべられたりします。そういえば、法人の設立届を出すときに、事務所の所在地の地図を手書きで書かせられたりしたなあ…わたしは、ヤクザル調査隊を通じて、人生に役に立つ様々なことを学んできましたが、法人運営にまつわる煩雑な事務手続も、その一つかもしれません。

屋久島いきもの調査隊通信「瀬切の森からの手紙」第10号

2025年1月30日 発行

発行者：特定非営利活動法人屋久島いきもの調査隊

住所：484-0003 犬山市善師野伏屋7-1

ホームページ：https://yakushimaikimono.com/

メールアドレス：yakuzaru.researchgroup@gmail.com

編集：半谷吾郎